公園の歴史：鉱業、工場、そして鉄道

本州における急速で強引とも言える開発は、北海道の開発にも反映されました。自然保護や持続可能な開発はほとんど考慮されませんでした。北海道はごくわずかな先住民が暮らす、広大で豊かな資源を持つ土地で、日本経済の成長の為ならば容易に搾取できる土地としか考えられていませんでした。このような考えのもと、鉱業は主要な産業となりました。この地が国立公園となるずっと前には、登別や美笛といった場所で採掘が行われており、支笏湖の西岸には金鉱山がありました。

ここの景観に傷跡を残した産業は鉱業だけではありません。例えば、支笏湖周辺の広大な手つかずの森は、安価な原材料を求める製紙会社にとって理想的な資源でした。彼らは間もなく森林を切り倒し、近くの苫小牧に工場を建設し始めました。1908 年には、製紙の為の木材を運んだり、千歳川に発電所を作る為の建設資材を運んだりする為に、苫小牧から支笏湖を結ぶ山線鉄道が建設されました。この路線を支える為に王子製紙会社は鋼鉄製の橋を購入し、その橋を千歳川にかけました。橋はその後、山線鉄橋として知られるようになりました。

やがてこのエリアは国立公園に指定され、全ての鉱山と工場が閉鎖されました。短期間ながらもかつてここに存在した重工業の証人となるものはほとんど残っていません。しかし、北海道最古の鉄橋である鮮やかな赤色をした山線鉄橋は今でも残っています。環境保護よりも経済発展が重要とされた時代を思い出させるものです。